

●実務にも学習にも役立つ企業財務の解説書

ハーバード・ケーススタディ方式で
企業財務を学ぶ

— 資金調達とM&A



発行：一般社団法人

金融財政事情研究会

著者：山田晴信

定価：二、五二〇円(税込)

【評者】**田代秀敏**
ビジネス・ブレークスルー大学教授

企業財務のあり方が、現在、真剣に問われている。

ある日本を代表する大手メーカーは、乾坤一擲の大規模な設備投資に失敗して巨額の赤字を計上し、大規模な人員整理と資産売却とを迫られている。株価が急落し、一旦は出資を約束した外国企業が出資条件の見直しを提案している間に、差し迫っている社債の償還に現預金残高が充分ではないことを理由に社債が格下げされ、経営危機に瀕している。

その一方で、今世紀に入ってから日本企業の設備投資は総体的に低調であった。そのため、銀行・保険を除く全産業合計での利益剰余金は、二〇一〇年度に二九三兆八八〇八億円に達し、〇一年度より約七五%増加した。しかし、ITバブル崩壊後の〇一〇二年度そしてリーマン・ショック後の〇八〇九年度は内部留保が取り崩されており、将来の投資の原資が定期的に蓄積されてきたとは言えない。

この二つの現象は、一見すると相反するように思われるが、どちらも企業財務（コーポレート・ファイナンス）が軽視されてきたことの帰結である。こ

の本が指摘する通り、「財務機能が企画部、経理部、総務部などにバラバラに分散され」、「財務機能の中心であるCFOが会社の機関としては存在していない」ことは日本企業で珍しくない。

しかし「財務の根幹は、将来の事業計画を資金面で支えるところにある」。その観点から、企業財務が真剣に問い直されるさまざまな場面を具体的に設定し、それを一步一步、丁寧に解説するのが、この本である。

各章の冒頭では企業財務の具体的な「ケース」が設定され、それに関する経営者あるいはCFOの側からの「質問」が列記される。次に「補足説明」で必要な用語が説明された上で、企業財務が専攻の教授からの「回答」が列記される。そして各節の要約として、経営者あるいはCFOと教授との「対話」が記される。その「対話」は、企業財務の知識を活用して、自分で問題点を見出し解決していくためのヒントに満ちている。説明は極めて丁寧かつ周到であり、ゆつくり読めば初学者も理解することができるだろう。

この本の章立てでは、企業の発展あるいは再編の段階を順に追っており、第一章「会社設立」、第二章「上場（IPO）」とM&A、第三章「企業戦略とビジネスポートフォリオ」、第四章「金融・資本市場の動向と資金調達手段の選

択」、第五章「事業再生ファイナンス」、第六章「企業の社会的責任」となっている。また、取り扱う会社の業種も、食品、ソーシャル・ネットワーク・サービス、素材、公益事業（電力）、コンピュータソフトウェア、商社と多岐に渡っており、幅広い知見を養うことができる。

企業財務を第一歩から勉強するのなら、「まとめ」として掲載されている著者の講演録「日本版CFOの役割と財務戦略」を先に読み、企業財務の全体像を把握してから、各章を順に読むのがよいだろう。しかし、必要な箇所は相互に参照されているので、興味に応じ、どの「ケース」あるいは「補足説明」からでも読み始めることができる。

この本の著書は、通産官僚、米国ビジネス・スクール留学、投資銀行、首相補佐官付き調査官、そして再び投資銀行と多彩なキャリアを重ねると並行して、日本のビジネス・スクールで教授を担当し、実務と学問との両面から企業財務に深く関わってきた。そうした著者の豊かな見識と経験とが反映されたこの本は、どの箇所も有益な指摘に満ちている。とりわけ第四章では、電力会社のあり方を、資本構成の観点から、「フクシマ」以前と以降とに場面を分け考察しており、極めて興味深い。